

# 空間ベクトル

## § 1 空間座標

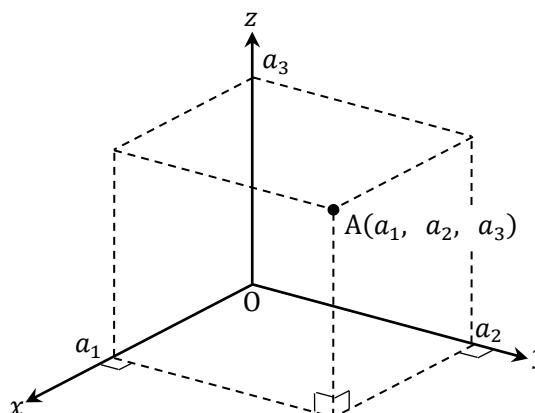
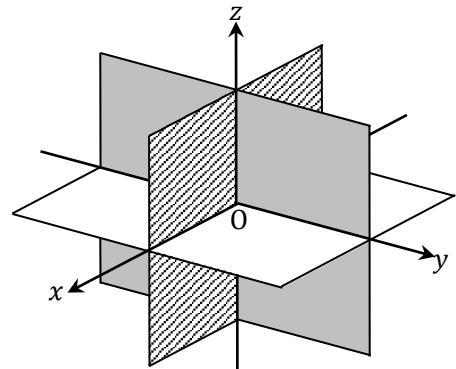
ここでは空間におけるベクトルを学んでいきます。今までとの違いは、ベクトルを扱う舞台が2次元から3次元に拡張されただけで、基本的には『平面ベクトル』で学んだことの繰り返しになります。

### ○ 空間座標

今まで扱ってきた平面の座標は $x$ 軸,  $y$ 軸の2本の軸で構成されていましたが、空間の座標は $x$ 軸,  $y$ 軸,  $z$ 軸の3本の座標軸によって定められます。



また、 $x$ 軸,  $y$ 軸によって定められる平面を $xy$ 平面(□面),  
 $y$ 軸,  $z$ 軸によって定められる平面を $yz$ 平面(■面),  
 $z$ 軸,  $x$ 軸によって定められる平面を $zx$ 平面(▨面)という。

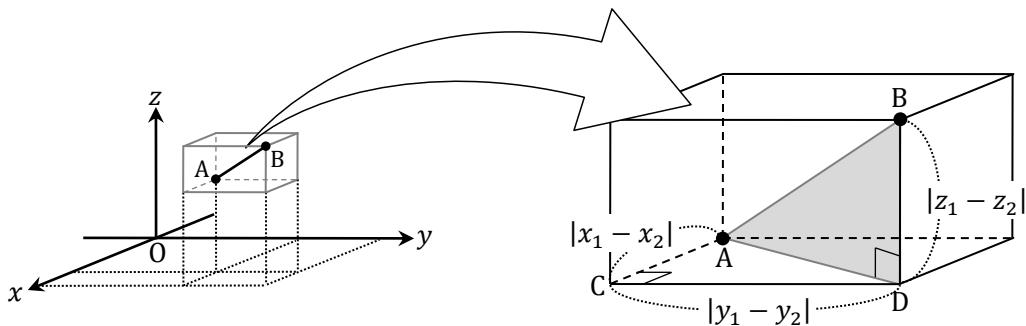


この空間内に任意の点 $A$ を、左図のようにとるととき、  
この点の座標は3つの数字を使って  
 $A(a_1, a_2, a_3)$   
と表すことができる。

## ○ 2点間の距離

この空間内に2点  $A(x_1, y_1, z_1)$ ,  $B(x_2, y_2, z_2)$  をとるととき,  $AB$  間の距離を考える。

これは2点  $AB$  を対角線とし, 各辺が各座標軸に平行な直方体を考えるとよい。



$AC = |x_1 - x_2|$ ,  $CD = |y_1 - y_2|$ ,  $DB = |z_1 - z_2|$  より,  $\triangle ACD$ において三平方の定理を用いると

$$AD^2 = AC^2 + CD^2 = (x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2$$

さらに,  $\triangle ADB$ において三平方の定理を用いると

$$AB^2 = AD^2 + BD^2 = (x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2 + (z_1 - z_2)^2$$

よって,  $AB = \sqrt{(x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2 + (z_1 - z_2)^2}$

### 2点間の距離

2点  $A(x_1, y_1, z_1)$ ,  $B(x_2, y_2, z_2)$  間の距離は

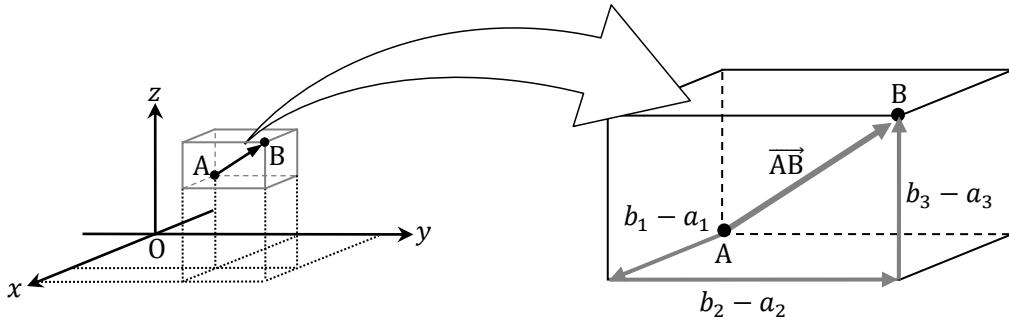
$$AB = \sqrt{(x_1 - x_2)^2 + (y_1 - y_2)^2 + (z_1 - z_2)^2}$$

## § 2 空間ベクトル

空間内に 2 点  $A(a_1, a_2, a_3)$ ,  $B(b_1, b_2, b_3)$  をとるとき, ベクトル  $\overrightarrow{AB}$  は

$$\overrightarrow{AB} = \begin{pmatrix} b_1 - a_1 \\ b_2 - a_2 \\ b_3 - a_3 \end{pmatrix}$$

と表すことができる。



### ○ 成分による演算

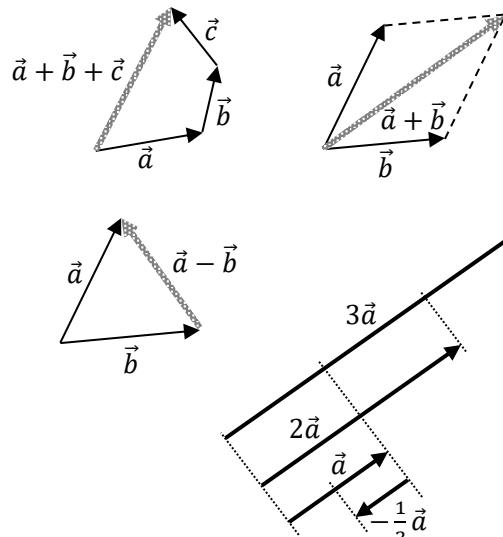
演算の方法自体は平面のときと同様に考える。

$$\vec{a} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{pmatrix}, \vec{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{pmatrix} \text{ のとき, 2 つのベクトルの}$$

和, 差, スカラー倍は次のようになる。

**和差**  $\vec{a} \pm \vec{b} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{pmatrix} \pm \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_1 \pm b_1 \\ a_2 \pm b_2 \\ a_3 \pm b_3 \end{pmatrix}$  (復号同順)

**スカラー倍**  $k\vec{a} = \begin{pmatrix} ka_1 \\ ka_2 \\ ka_3 \end{pmatrix}$  ( $k$  は実数)



### ○ ベクトルの内積

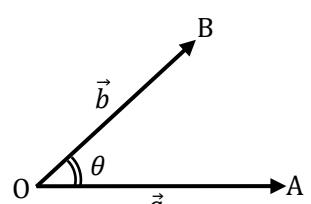
平面のときと同様, ベクトルの内積は  $\vec{a} \cdot \vec{b} = |\vec{a}||\vec{b}| \cos \theta$  で定義される。

$$\vec{a} = \begin{pmatrix} a_1 \\ a_2 \\ a_3 \end{pmatrix}, \vec{b} = \begin{pmatrix} b_1 \\ b_2 \\ b_3 \end{pmatrix} \text{ のとき, 内積の成分表示は, 以下のようになる。}$$

**内積の成分表示**

$$\vec{a} \cdot \vec{b} = a_1 b_1 + a_2 b_2 + a_3 b_3$$

証明に関しては平面のときとほぼ同じである。



## § 3 位置ベクトル

空間内にある点 A が  $\overrightarrow{OA} = \vec{a}$  によって定まるとき、このベクトル  $\vec{a}$  を点 A の**位置ベクトル**という。  
位置ベクトルが  $\vec{a}$  である点 A を  $A(\vec{a})$  と表す。

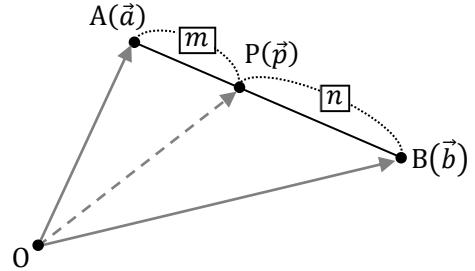
### ○ 分点の位置ベクトル

分点の位置ベクトルは平面のときと同様に、以下のように表せる。

#### 分点の位置ベクトル

2点  $A(\vec{a})$ ,  $B(\vec{b})$  に対して、線分 AB を  $m : n$  に内分する点  $P(\vec{p})$ , 外分する点  $Q(\vec{q})$  の位置ベクトル

$$\vec{p} = \frac{n\vec{a} + m\vec{b}}{m + n}, \quad \vec{q} = \frac{-n\vec{a} + m\vec{b}}{m - n}$$



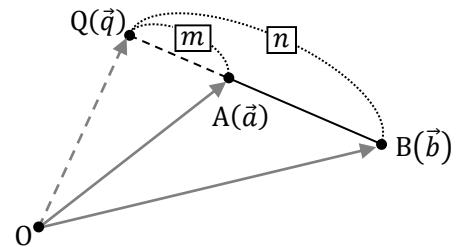
なお、中点の位置ベクトルは  $m : n = 1 : 1$  のときなので  $\frac{\vec{a} + \vec{b}}{2}$  となる。

また、 $A(a_1, a_2, a_3)$ ,  $B(b_1, b_2, b_3)$  として、成分表示することで内分点 P, 外分点 Q, 中点 M の座標が以下のように求まる。

$$P\left(\frac{na_1 + mb_1}{m+n}, \frac{na_2 + mb_2}{m+n}, \frac{na_3 + mb_3}{m+n}\right)$$

$$Q\left(\frac{-na_1 + mb_1}{m-n}, \frac{-na_2 + mb_2}{m-n}, \frac{-na_3 + mb_3}{m-n}\right)$$

$$M\left(\frac{a_1 + b_1}{2}, \frac{a_2 + b_2}{2}, \frac{a_3 + b_3}{2}\right)$$



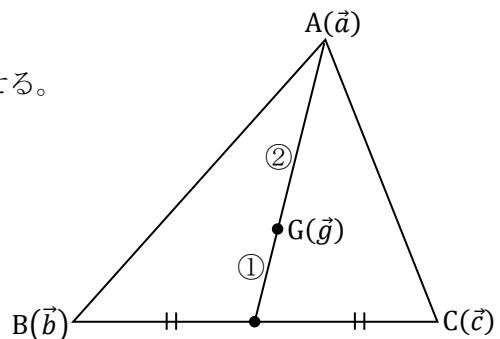
### ○ 重心の位置ベクトル

重心の位置ベクトルも平面のときと同様に、以下のように表せる。

#### 重心の位置ベクトル

3点  $A(\vec{a})$ ,  $B(\vec{b})$ ,  $C(\vec{c})$  に対して  $\triangle ABC$  の重心 G の位置ベクトル  $\vec{g}$  は次のようになる。

$$\vec{g} = \frac{\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}}{3}$$



また、 $A(a_1, a_2, a_3)$ ,  $B(b_1, b_2, b_3)$ ,  $C(c_1, c_2, c_3)$  として、成分表示することで重心 G の座標が以下のように求まる。

$$G\left(\frac{a_1 + b_1 + c_1}{3}, \frac{a_2 + b_2 + c_2}{3}, \frac{a_3 + b_3 + c_3}{3}\right)$$



ベクトルを用いると、平面でも空間でも同じ位置表示となります。これがベクトルの便利なところです。

## ○ 1次独立

同一平面上にない 3 つのベクトル  $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$ ,  $\vec{c}$  ( $\vec{a} \neq \vec{0}$ ,  $\vec{b} \neq \vec{0}$ ,  $\vec{c} \neq \vec{0}$ ) について、以下のことが成り立つ。

### 1次独立なベクトル

空間内の任意のベクトル  $\vec{x}$  は  $\vec{x} = s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c}$  の形で与えることができ、その表し方はただ 1 通りである。

このとき、3 つのベクトル  $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$ ,  $\vec{c}$  は **1次独立** であるという。

#### 証明①

$\overrightarrow{OP} = \vec{x}$ ,  $\overrightarrow{OA} = \vec{a}$ ,  $\overrightarrow{OB} = \vec{b}$ ,  $\overrightarrow{OC} = \vec{c}$  とおく。

点  $P$  を通り、 $OC$  に平行な直線と、平面  $OAB$  との交点を  $P'$  とするとき、

$$\overrightarrow{OP} = \overrightarrow{OP'} + \overrightarrow{P'P} = \overrightarrow{OP'} + u\vec{c} \quad (u \text{ は実数})$$

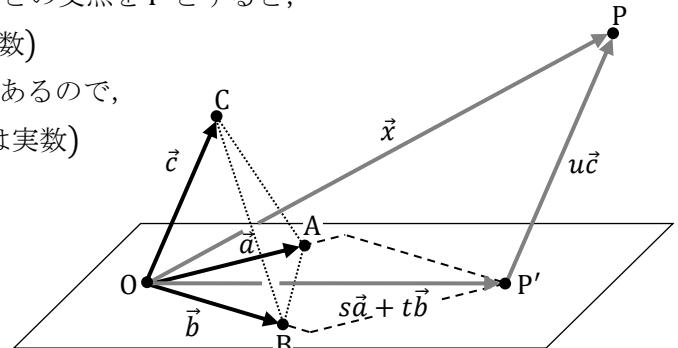
とおける。4 点  $O$ ,  $A$ ,  $B$ ,  $P'$  は同一平面上にあるので、

$$\overrightarrow{OP'} = s\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB} = s\vec{a} + t\vec{b} \quad (s, t \text{ は実数})$$

となるので、

$$\vec{x} = s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c}$$

と表すことができ、さらに、 $s$ ,  $t$  の選び方はただ 1 通りに定まる。



#### 証明②(表し方が 1 通りであること)

$\vec{x}$  が  $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$ ,  $\vec{c}$  を用いて 2 通りに表せたと仮定する。

つまり、

$$\vec{x} = s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c} = s'\vec{a} + t'\vec{b} + u'\vec{c}$$

と表せたとする。

この 2 つの表示が異なるので、 $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$ ,  $\vec{c}$  の係数の少なくとも 1 つは異なる。

今、それを  $s \neq s'$  とすると、

$$s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c} = s'\vec{a} + t'\vec{b} + u'\vec{c} \Leftrightarrow (s - s')\vec{a} = (t' - t)\vec{b} + (u' - u)\vec{c}$$

$$\Leftrightarrow \vec{a} = \frac{t' - t}{s - s'}\vec{b} + \frac{u' - u}{s - s'}\vec{c} \quad (\because s - s' \neq 0)$$

これは、 $\vec{a}$  が  $\vec{b}$ ,  $\vec{c}$  と同一平面上にあることになり矛盾する。

よって、表し方は 1 通りとなる。

これより、 $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$ ,  $\vec{c}$  が 1 次独立であるとき、

$$s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c} = s'\vec{a} + t'\vec{b} + u'\vec{c} \Leftrightarrow s = s', t = t', u = u'$$

$$s\vec{a} + t\vec{b} + u\vec{c} = \vec{0} \Leftrightarrow s = 0, t = 0, u = 0$$

が成り立つことが分かる。

逆に、同一平面内に  $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$ ,  $\vec{c}$  があるとき、これらは空間内の任意のベクトルを表すことができない。

( $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$ ,  $\vec{c}$  と同一平面上のベクトルしか表せない。)

このとき、3 つのベクトル  $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$ ,  $\vec{c}$  は **1次従属** であるという。

## § 4 ベクトル方程式

ここでは直線、球、平面上の任意の点を、原点からの位置ベクトルを用いて表すことを目標とする。

### ○ 直線のベクトル方程式

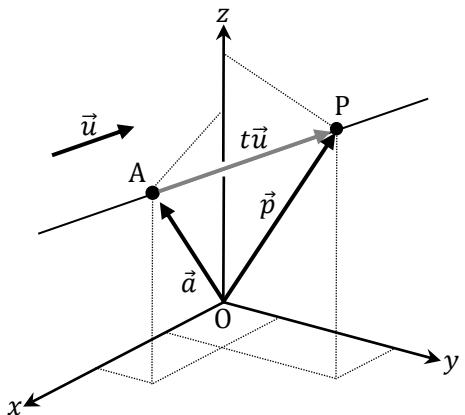
#### ① 点 $A(\vec{a})$ を通り、 $\vec{u}$ に平行な直線

直線上の任意の点を  $P(\vec{p})$  とすると、点  $P$  の位置ベクトルは

$$\vec{p} = \vec{a} + t\vec{u} \quad (t \text{ は実数}) \quad \cdots (*)$$

と表すことができる。

$\vec{u}$  のように直線  $l$  と平行なベクトルを **方向ベクトル** という。



#### 直線の方程式

ここで、 $A(x_0, y_0, z_0)$ ,  $P(x, y, z)$ ,  $\vec{u} = \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$  とすると、

$$\vec{p} = \vec{a} + t\vec{u} \Leftrightarrow \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_0 \\ y_0 \\ z_0 \end{pmatrix} + t \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} \Leftrightarrow \begin{cases} x = x_0 + at \\ y = y_0 + bt \\ z = z_0 + ct \end{cases} \cdots (*)$$

(\*) は直線の媒介変数表示である。

(\*) から  $t$  を消去すると、直線の方程式が得られる。

$$x = x_0 + at \Leftrightarrow t = \frac{x - x_0}{a}, \quad y = y_0 + bt \Leftrightarrow t = \frac{y - y_0}{b}, \quad z = z_0 + ct \Leftrightarrow t = \frac{z - z_0}{c}$$

$$\text{これより, } t \text{ を消去すると, } \frac{x - x_0}{a} = \frac{y - y_0}{b} = \frac{z - z_0}{c}$$

#### 空間における直線の方程式

方向ベクトルが  $\vec{u} = (a, b, c)$  で、  
点  $A(x_0, y_0, z_0)$  を通る直線の方程式は

$$\frac{x - x_0}{a} = \frac{y - y_0}{b} = \frac{z - z_0}{c}$$

#### ② 2点 $A(\vec{a}), B(\vec{b})$ を通る直線

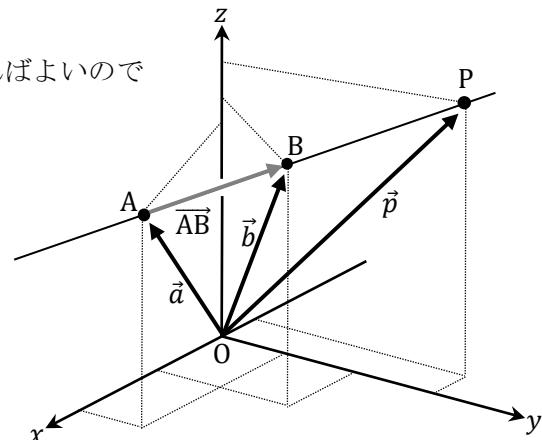
これは  $\vec{AB} = \vec{b} - \vec{a}$  を方向ベクトルとする直線と考えればよいので

$$\vec{p} = \vec{a} + t(\vec{b} - \vec{a}) = (1 - t)\vec{a} + t\vec{b}$$

と表すことができる。また、 $1 - t = s$  とくと、

$$\vec{p} = s\vec{a} + t\vec{b} \quad (s + t = 1)$$

と表すこともできる。



**例1** 2点 A(1, 2, 3), B(4, 5, 6) を通る直線を  $l$  とする。

(1) 直線  $l$  と  $xy$  平面の交点の座標を求めなさい。

(2) 点 C(-3, 2, 1) を通り,  $\vec{u} = (1, 3, 2)$  に平行な直線を  $m$  とする。2直線  $l, m$  の交点の座標を求めなさい。

(1) 直線  $l$  上の任意の点  $P$  とすると,

$$\overrightarrow{OP} = (1-t)\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB} = (1+3t, 2+3t, 3+3t)$$

点  $P$  の  $z$  座標が 0 になるような  $t$  の値は,  $3+3t=0 \Leftrightarrow t=-1$

これより, 直線  $l$  と  $xy$  平面の交点の座標は  $(-2, -1, 0)$

(2) 直線  $m$  上の任意の点  $Q$  とすると,

$$\overrightarrow{OQ} = \overrightarrow{OC} + s\vec{u} = (-3+s, 2+3s, 1+2s)$$

2点  $P, Q$  が一致するような  $s, t$  の組合せを考えればよいので,

$$\begin{cases} 1+3t = -3+s \\ 2+3t = 2+3s \\ 3+3t = 1+2s \end{cases} \Leftrightarrow \begin{cases} s-3t = 4 & \cdots ① \\ 3s-3t = 0 & \cdots ② \\ 2s-3t = 2 & \cdots ③ \end{cases}$$

①, ②より,  $(s, t) = (-2, -2)$

これは③を満たす。

よって, 2直線  $l, m$  の交点の座標は  $(-5, -4, -3)$

## ○ 平面のベクトル方程式

空間内に同一直線上にない3点  $A(\vec{a}), B(\vec{b}), C(\vec{c})$  があり, この3点で定まる平面を  $\alpha$  とする。

ここではこの平面  $\alpha$  のベクトル方程式を考える。

今, 平面上の任意の点  $P(\vec{p})$  とすると, 4点  $A, B, C, P$  は

同一平面上にあるので,

$$\overrightarrow{AP} = s\overrightarrow{AB} + t\overrightarrow{AC} \quad (s, t \text{ は実数})$$

と表すことができる。

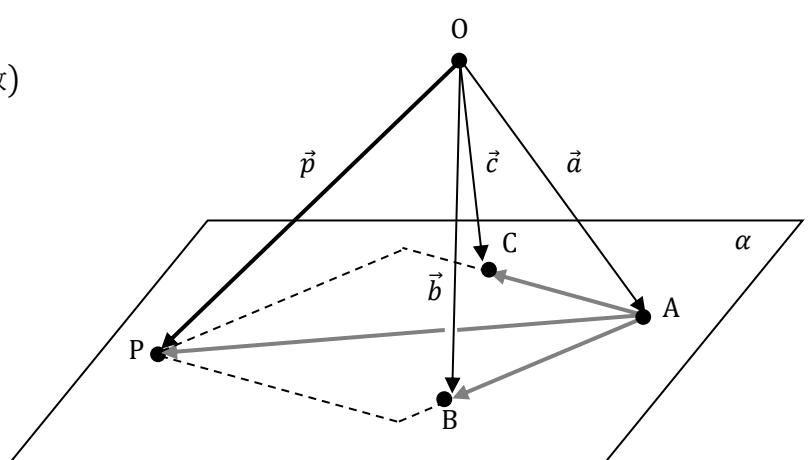
これより,  $\vec{p} = \vec{a} + \overrightarrow{AP}$

$$\begin{aligned} &= \vec{a} + s\overrightarrow{AB} + t\overrightarrow{AC} \\ &= \vec{a} + s(\vec{b} - \vec{a}) + t(\vec{c} - \vec{a}) \\ &= (1-s-t)\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c} \end{aligned}$$

$1-s-t = r$  とおくと,

$$\vec{p} = r\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c} \quad (r+s+t=1)$$

と表すことができる。



**例2** 四面体OABCにおいて、OA, OBの中点をそれぞれM, Nとおき、△CMNの重心をGとする。直線OGと平面ABCの交点をHとするとき、OG:GHを求めなさい。

まずは、1次独立の性質を使って解きます。

点Hというのは直線OGと平面ABCの交点なので、それぞれの図形上にある条件を立式することで、解くことができます。

**解①**

$$\overrightarrow{OG} = \frac{\overrightarrow{OM} + \overrightarrow{ON} + \overrightarrow{OC}}{3} = \frac{\frac{\overrightarrow{OA}}{2} + \frac{\overrightarrow{OB}}{2} + \overrightarrow{OC}}{3} = \frac{\overrightarrow{OA}}{6} + \frac{\overrightarrow{OB}}{6} + \frac{\overrightarrow{OC}}{3}$$

$$O, G, H \text{ は同一直線上より, } \overrightarrow{OH} = k\overrightarrow{OG} = \frac{k}{6}\overrightarrow{OA} + \frac{k}{6}\overrightarrow{OB} + \frac{k}{3}\overrightarrow{OC}$$

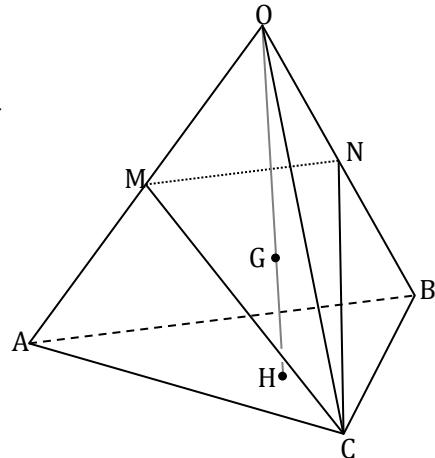
A, B, C, Hは同一平面上より、

$$\overrightarrow{OH} = s\overrightarrow{OA} + t\overrightarrow{OB} + u\overrightarrow{OC} \quad (s + t + u = 1 \cdots ①)$$

$$\overrightarrow{OA}, \overrightarrow{OB}, \overrightarrow{OC} \text{ は1次独立より, } s = \frac{k}{6}, t = \frac{k}{6}, u = \frac{k}{3}$$

$$① \text{に代入すると, } \frac{k}{6} + \frac{k}{6} + \frac{k}{3} = 1 \Leftrightarrow k = \frac{3}{2}$$

$$\text{よって, } \overrightarrow{OH} = \frac{3}{2}\overrightarrow{OG} \text{ となるので, } OG:GH = 2:1$$



係数を足して1である性質を使った方が、解答がシンプルになります。

**解②**

$$\overrightarrow{OG} = \frac{\overrightarrow{OM} + \overrightarrow{ON} + \overrightarrow{OC}}{3} = \frac{\frac{\overrightarrow{OA}}{2} + \frac{\overrightarrow{OB}}{2} + \overrightarrow{OC}}{3} = \frac{\overrightarrow{OA}}{6} + \frac{\overrightarrow{OB}}{6} + \frac{\overrightarrow{OC}}{3}$$

$$O, G, H \text{ は同一直線上より, } \overrightarrow{OH} = k\overrightarrow{OG} = \frac{k}{6}\overrightarrow{OA} + \frac{k}{6}\overrightarrow{OB} + \frac{k}{3}\overrightarrow{OC}$$

$$A, B, C, H \text{ は同一平面上より, } \frac{k}{6} + \frac{k}{6} + \frac{k}{3} = 1 \Leftrightarrow k = \frac{3}{2}$$

$$\text{よって, } \overrightarrow{OH} = \frac{3}{2}\overrightarrow{OG} \text{ となるので, } OG:GH = 2:1$$

## 平面の方程式

平面上の任意の点  $P$  の位置ベクトルは  $\vec{p} = \vec{a} + s\vec{AB} + t\vec{AC}$  と表せる。

ここで、この平面の法線ベクトル(平面に垂直なベクトル)を  $\vec{n}$  とすると、

$\vec{AB} \perp \vec{n}$ ,  $\vec{AC} \perp \vec{n}$  より、 $\vec{AB} \cdot \vec{n} = \vec{AC} \cdot \vec{n} = 0$

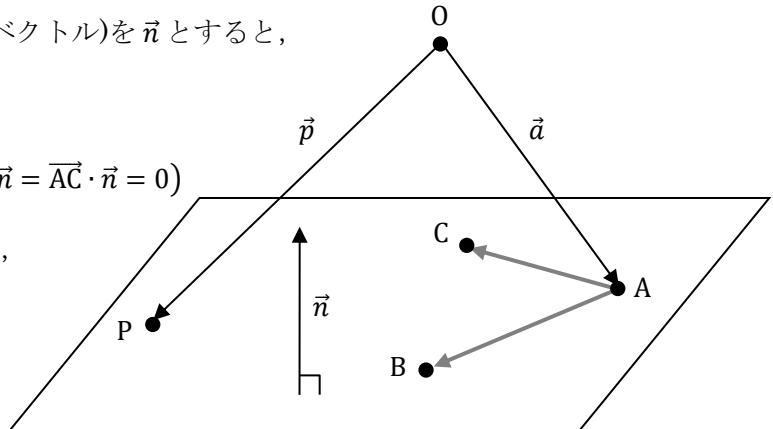
これより、

$$\vec{p} \cdot \vec{n} = (\vec{a} + s\vec{AB} + t\vec{AC}) \cdot \vec{n} = \vec{a} \cdot \vec{n} \quad (\because \vec{AB} \cdot \vec{n} = \vec{AC} \cdot \vec{n} = 0)$$

ここで、 $\vec{p} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ ,  $\vec{n} = \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$ ,  $\vec{a} \cdot \vec{n} = -d$  とすると、

$$\vec{p} \cdot \vec{n} = \vec{a} \cdot \vec{n} \Leftrightarrow ax + by + cz = -d$$

$$\Leftrightarrow ax + by + cz + d = 0$$



これは法線ベクトルが  $\vec{n} = \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$  である **平面の方程式** となっている。

(参考)

法線ベクトルが  $\vec{n} = \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$  である直線の方程式  

$$ax + by + cz + d = 0$$

### 平面の方程式

法線ベクトルが  $\vec{n} = (a, b, c)$  である平面の方程式は

$$ax + by + cz + d = 0$$

**例3** 3点  $A(1, 0, 1)$ ,  $B(1, 2, 3)$ ,  $C(-1, 2, 0)$  を通る平面の方程式を求めなさい。

#### 解①

求める平面の方程式を  $ax + by + cz + d = 0 \cdots (*)$  とおく。

3点  $A$ ,  $B$ ,  $C$  の座標を代入すると、

$$a + c + d = 0 \cdots ① \quad a + 2b + 3c + d = 0 \cdots ② \quad -a + 2b + d = 0 \cdots ③$$

$$② - ① \text{ より, } 2b + 2c = 0 \Leftrightarrow b = -c$$

$$② - ③ \text{ より, } 2a + 3c = 0 \Leftrightarrow a = -\frac{3}{2}c$$

$$\text{よって} ① \text{ より, } d = -a - c = \frac{3}{2}c - c = \frac{1}{2}c$$

$$\text{以上より平面の方程式は, } (*) \Leftrightarrow -\frac{3}{2}cx - cy + cz + \frac{1}{2}c = 0 \Leftrightarrow 3x + 2y - 2z - 1 = 0$$

次に法線ベクトルを用いて、平面の方程式を求めてみます。

**解②**

求める平面の方程式の法線ベクトルは、 $\vec{AB}$ ,  $\vec{AC}$ に垂直なベクトルとなる。

$$\vec{AB} = (0, 2, 2), \vec{AC} = (-2, 2, -1)$$

法線ベクトルを  $\vec{n} = (a, b, c)$  とすると、

$$\vec{AB} \cdot \vec{n} = 0 \Leftrightarrow 2b + 2c = 0 \Leftrightarrow b = -c$$

$$\vec{AC} \cdot \vec{n} = 0 \Leftrightarrow -2a + 2b - c = 0$$

$$2式より, b を消去すると, -2a - 2c - c = 0 \Leftrightarrow a = -\frac{3}{2}c$$

$$\text{よって, } \vec{n} = \left( -\frac{3}{2}c, -c, c \right) \parallel (3, 2, -2)$$

これより、求める平面の法線ベクトルは、 $(3, 2, -2)$  となるので、

平面の方程式は、 $3x + 2y - 2z + d = 0$  とおける。

$$\text{これが, } A(1, 0, 1) \text{ を通るので, } 3 - 2 + d = 0 \Leftrightarrow d = -1$$

$$\text{以上より, 求める平面の方程式は, } 3x + 2y - 2z - 1 = 0$$

## ○ 点と平面の距離

点  $A(x_1, y_1, z_1)$  から平面  $ax + by + cz + d = 0$  に下ろした垂線の足を  $H$  とするとき、 $AH$  の長さを **点と平面の距離** といい、次のような関係式が成り立つ。

**点と平面の距離**

点  $(x_1, y_1, z_1)$  と平面  $ax + by + cz + d = 0$  の距離  $d$  は

$$d = \frac{|ax_1 + by_1 + cz_1 + d|}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}}$$

(参考) 点  $(x_1, y_1)$  と直線

$ax + by + c = 0$  の距離  $d$  は

$$d = \frac{|ax_1 + by_1 + d|}{\sqrt{a^2 + b^2}}$$

**証明①**

法線ベクトルを  $\vec{n} = \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$  とすると、 $\vec{AH} = k\vec{n} = \begin{pmatrix} ka \\ kb \\ kc \end{pmatrix}$

$$\text{よって, } \vec{OH} = \vec{OA} + \vec{AH} = \begin{pmatrix} x_1 \\ y_1 \\ z_1 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} ka \\ kb \\ kc \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x_1 + ka \\ y_1 + kb \\ z_1 + kc \end{pmatrix}$$

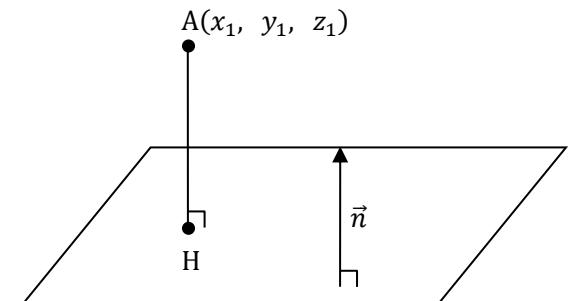
これより、 $H(x_1 + ka, y_1 + kb, z_1 + kc)$  となる。

点  $H$  は平面  $ax + by + cz + d = 0$  上より、

$$a(x_1 + ka) + b(y_1 + kb) + c(z_1 + kc) + d = 0 \Leftrightarrow k = -\frac{ax_1 + by_1 + cz_1 + d}{a^2 + b^2 + c^2}$$

よって、

$$|\vec{AH}| = |k\vec{n}| = |k||\vec{n}| = \left| -\frac{ax_1 + by_1 + cz_1 + d}{a^2 + b^2 + c^2} \right| \sqrt{a^2 + b^2 + c^2} = \frac{|ax_1 + by_1 + cz_1 + d|}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}}$$



### 証明②(内積の性質を使うと…)

平面  $ax + by + cz + d = 0$  に垂直な単位ベクトルを  $\vec{n}$  とすると,

$$\vec{n} = \frac{1}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}} \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix}$$

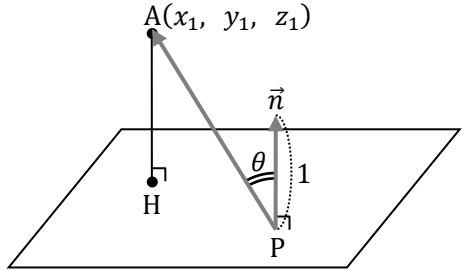
平面上に  $P(x_0, y_0, z_0)$  をとり,  $\overrightarrow{PA}$  と  $\vec{n}$  のなす角を  $\theta$  とすると,

$$AH = |\overrightarrow{PA} \cos \theta|$$

$$\begin{aligned} &= |\overrightarrow{PA} \cdot \vec{n}| \\ &= \left| \frac{1}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}} \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} \cdot \begin{pmatrix} x_1 - x_0 \\ y_1 - y_0 \\ z_1 - z_0 \end{pmatrix} \right| \\ &= \left| \frac{ax_1 + by_1 + cz_1 - (ax_0 + by_0 + cz_0)}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}} \right| \end{aligned}$$

点  $P$  は平面  $ax + by + cz + d = 0$  上より,  $ax_0 + by_0 + cz_0 = -d$

$$\text{よって, } AH = \left| \frac{ax_1 + by_1 + cz_1 + d}{\sqrt{a^2 + b^2 + c^2}} \right|$$



## ○ 球のベクトル方程式

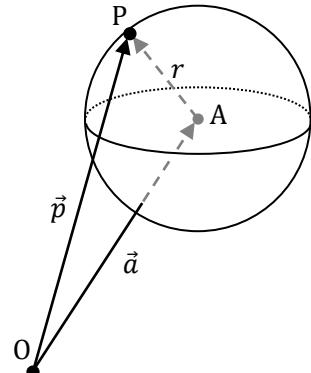
空間において, 点  $A$  から距離が一定である点の軌跡は**球**になる。

中心が  $A(\vec{a})$ , 半径  $r$  の球面上の任意の点を  $P(\vec{p})$  とすると,

球のベクトル方程式は, 常に  $|\overrightarrow{AP}| = r$  となるので,

$$|\vec{p} - \vec{a}| = r$$

と表すことができる。



### 球の方程式

ここで,  $A(a, b, c)$ ,  $P(x, y, z)$  とすると,

$$|\vec{p} - \vec{a}| = r \Leftrightarrow \left| \begin{pmatrix} x - a \\ y - b \\ z - c \end{pmatrix} \right| = r \Leftrightarrow \sqrt{(x - a)^2 + (y - b)^2 + (z - c)^2} = r$$

両辺 2乗して,  $(x - a)^2 + (y - b)^2 + (z - c)^2 = r^2$

これは中心  $A(a, b, c)$ , 半径  $r$  の**球の方程式**がとなっている。

### 球の方程式

中心  $A(a, b, c)$ , 半径  $r$  の球の方程式は

$$(x - a)^2 + (y - b)^2 + (z - c)^2 = r^2$$

**例4** 球面  $S : x^2 + y^2 + z^2 - 2x - 4y - 6z - 2 = 0$  と  $xy$  平面の交わりは円になる。この円の中心と半径を求めなさい。

**解①**

$$(x-1)^2 + (y-2)^2 + (z-3)^2 = 16 \text{ より,}$$

球面  $S$  は中心  $(1, 2, 3)$ , 半径 4 の球である。

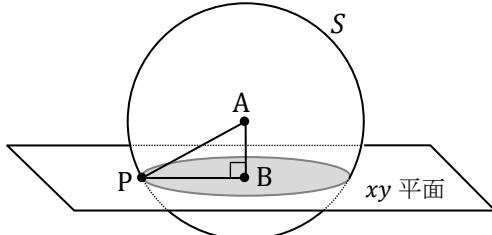
これより, 切り口の円の中心は  $(1, 2, 0)$  となる。

$A(1, 2, 3)$ ,  $B(1, 2, 0)$  とおき, 切り口の円の周上の任意の点を  $P$  とすると,  $\angle ABP = 90^\circ$ ,  $AP = 4$ ,

$AB = 3$  より,

$$BP^2 = AP^2 - AB^2 = 4^2 - 3^2 = 7$$

よって, 切り口の円の半径は,  $\sqrt{7}$



$xy$  平面が  $z = 0$  という式で表されることを用いても解くことができます。

**解②**

$$x^2 + y^2 + z^2 - 2x - 4y - 6z - 2 = 0 \text{ に } z = 0 \text{ を代入すると,}$$

$$x^2 + y^2 - 2x - 4y - 2 = 0$$

これが切り口の円の方程式となる。

$$(x-1)^2 + (y-2)^2 = 7 \text{ より, 切り口は中心 } (1, 2, 0), \text{ 半径 } \sqrt{7} \text{ の円となる。}$$

**例5** 球面  $S : x^2 + y^2 + z^2 - 2x - 4y - 6z - 2 = 0$  と平面  $\alpha : 2x + y - z + 5 = 0$  の交わりは円になる。この円の中心と半径を求めなさい。

本問は斜めの平面による球の切断です。先ほどより少し複雑になります。

$$(x-1)^2 + (y-2)^2 + (z-3)^2 = 16 \text{ より,}$$

球面  $S$  は中心  $(1, 2, 3)$ , 半径 4 の球である。

$A(1, 2, 3)$  とおき, 切り口の円の中心を  $B$ , 周上の任意の点を  $P$  とすると,  $\angle ABP = 90^\circ$ ,  $AP = 4$  となる。

$$\text{点と平面の距離の公式から, } AB = \frac{|2 \cdot 1 + 2 - 3 + 5|}{\sqrt{2^2 + 1^2 + (-1)^2}} = \frac{6}{\sqrt{6}} = \sqrt{6}$$

これより,  $BP^2 = AP^2 - AB^2 = 4^2 - (\sqrt{6})^2 = 10$

よって, 切り口の円の半径は,  $\sqrt{10}$

また, 平面  $\alpha$  の法線ベクトルを  $\vec{n}$  とおくと,

$$\overrightarrow{OB} = \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AB} = \overrightarrow{OA} + k\vec{n} = (1, 2, 3) + k(2, 1, -1) = (2k+1, k+2, -k+3)$$

よって,  $B(2k+1, k+2, -k+3)$

これが, 平面  $\alpha$  上にあるので,

$$2(2k+1) + k + 2 - (-k+3) + 5 = 0 \Leftrightarrow k = -1$$

よって, 切り口の円の中心の座標は,  $B(-1, 1, 4)$

